The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介「首が落ちた話」と『聊斎志異』の「諸城某甲」 : 継承と変容
Author(s)	陳, 潮涯
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2018, 52, p. 39-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

芥川龍之介「首が落ちた話」と『聊斎志異』の「諸城某甲」

――継承と変容――

陳　潮 涯

キーワード：芥川龍之介／首が落ちた話／聊斎志異／受容／変容

1、はじめに

『聊斎志異』は中国清代の短篇怪奇小説集（各版本によって編目が異なっているが、500篇前後が定説）の文言小説である。作者蒲松齢（1640-1715年）は当時伝わっていた狐、鬼、妖怪、仙人などの怪異譚を収集した上で自分の創作を加え、『聊斎志異』にまとめた。蒲は、少年時代から文名を知られていた天才であったが、数十年間科挙試験に失敗し続けて出世できず、郷紳の幕僚と教師の職で生計を立てた不遇な知識人である。彼は、『聊斎志異』が自分の孤独と現実批判を託す本であると序文で述べた。したがって『聊斎志異』は、猟奇性を扱うのに終始するばかりのほかの中国怪奇小説集とは異なっており、時に「異史氏曰」という議論の部分が付けられている。

1768年、『聊斎志異』は長崎に到着した唐船によって日本に入った。[1)] 大正時代に入ると、柴田天馬の『和訳聊斎志異』（玄文社、1919年）の出版をはじめ、『聊斎志異』翻訳が専門の漢文学者ないし翻訳家によって行われ、本格化していった。それとともに、芥川龍之介を代表とする、『聊斎志異』から材を取り、独自な作品を作り上げる新しい受容形式も現れた。

今までの先行研究によって、芥川が『聊斎志異』を主な材源として書いた短篇小説は四篇あることが指摘されている。具体的には、「仙人」（1915年）が「雨銭」と「鼠戯」から、「酒虫」（1916年）が「酒虫」から、「首の落ち

た話」（1917年）が「諸城某甲」から、「仙人」（1922年）が「労山道士」から材を取っている。

本稿は、「首が落ちた話」[2)]と、その種本となっている『聊斎志異』の「諸城某甲」を巡って比較考察を行う。1917年12月、芥川龍之介は「首が落ちた話」を書きあげ、翌年『新潮』の1月号に掲載した。これは、日清戦争で首が切られた清の兵士・何小二が奇跡的に生還するも、一年後の酒楼で飲み仲間と喧嘩したところ首がまた落ちてしまい、命を落とす話である。この作品に関しては、『聊斎志異』を含め、トルストイの『戦争と平和』やポーの「鋸山奇譚」といった作品から筋や発想が輸入されている旨の指摘がある。しかし芥川自身の証言においては、『聊斎志異』の「諸城某甲」以外、他の材源は一切提示されなかった。このことを鑑みれば、芥川の創作欲を引き出して新たな作品を生み出させた主たる材源は、『聊斎志異』の「諸城某甲」であるに違いない。

では、なぜ芥川は『聊斎志異』の「諸城某甲」を材源にしたのだろうか。本稿は「諸城某甲」の特色を考察したうえで、この問題の解明を試みる。その上で、芥川龍之介がどのように「諸城某甲」の特色を自分の創作に取り入れ、また新たな意味づけを行ったのかを分析したい。

2、類話から見える「諸城某甲」

「諸城某甲」のあらすじは以下の通りである。某甲という男は戦乱の最中斬りかかられ、一筋の皮をつないで首が垂れてしまう。家族が某甲の死体を見つけるが、その体がまだ温かったことから、彼を埋葬せずに手当てする。その後半年をかけて傷口がふさがり、生き返った某甲はそのまま無事に十数年間生き、ある日、一人の隣人が語った笑い話を聞いて大笑いする。そして仰け反ったところ古い傷がまた裂け、某甲の首が落ちて今回は本当に死んでしまう。某甲の家族が隣人を訴えたところ、隣人たちは葬式のお金を出してこの訴訟を済ませた。

まず注目しておきたいのは、首が落ちたが生き返るという話は、『聊斎志異』の「諸城某甲」にオリジナルなものではなく、中国古典の中の一種の類話であるということである。そういった話を紹介した書籍として、「芥川龍之介文庫」にも名の挙がる漢籍、『太平広記』（宋・李昉ら編集、計500巻）が挙げられる。これは、漢代から北宋までの著書から奇談、説話を分類、収録した類書である。『太平広記』376巻の「再生二」という部類には、人間が奇跡的に生還、あるいは復活する話が収録されている。その中には、「諸城某甲」に類似した、首を斬られながらも生還する断頭再生譚の「鄭会」「王穆」「邵進」「李大尉軍士」「五原将校」という計5篇が提示された。特に『聊斎志異』の「諸城某甲」、そして芥川の「首が落ちた話」と最も相似しているのは、戦場で首を切られた者が死亡せず、馬に載せられ、手当を受けて無事生還するという「王穆」[3)]の話である。これ以外、「鄭会」では主人公の死体と頭を別々のところで発見した家族が、主人公の魂の命じるまま、桑の木の皮を糸にして死体と頭を縫い合わせる。「邵進」では妻が針で主人公の首を縫う。「李大尉軍士」では地獄の役人が長い針で主人公の頭のてっぺんから頸までを貫き、彼の頭を固定させる。また、「五原将校」では地獄の役人が主人公を手当てし、粥を食べさせる。いずれの説話においても、大きな紙幅を割いて生還や復活の手段を叙述しており、ある意味猟奇性に主眼をおいた物語であると言える。また、これらの物語においては復活した主人公がそのまま無事に生き続けるというハッピーエンドが一般的である。

『聊斎志異』の「諸城某甲」も断頭再生譚に属する話であるが、それらの話より更に奇抜な展開と結末を持っている。主人公某甲は首が切られたあと手当てを受けて十年程生き延びるが、大笑いしたせいで古い傷跡が裂け、二回目の死を遂げる。既に述べた通り、『聊斎志異』は蒲氏自身の創作と、彼が収集した説話や奇聞によって構成されている。「諸城某甲」は蒲氏の創作ではなく、孫景夏という人物から耳にした話なのである。奇聞怪談を熟読した蒲松齢は、従来の断頭再生譚と異なる展開と結末に興味を感じていたからこそ、この奇聞を『聊斎志異』に収録したのではないか。わずか百字程度の

「諸城某甲」に対して、蒲氏は以下のような議論を付け加えている。

> 原文：異史氏曰，一笑頭落，此千古一大笑也。頸連一線而不死，直待十年後成一笑獄，豈非二三鄰人負債前生者也耶。[4)]

「訳」:異史氏（蒲氏の自称、発表者注）曰く――一笑して頭が落ちるとは、これぞ千古第一の大笑である。頸が糸一筋ほどつながっていたために死なず、そのまま十年の後を待ち、一笑の訴訟沙汰をひきおこした、というのは、さては、二、三の隣人が前世で債を負っていたのかもしれぬ。[5)]

蒲氏の議論は、一回目の断頭ではなく、不意に訪ねた二回目の死に重点を置いている。「二、三の隣人が前世で債を負っていたのかもしれぬ」というのは、隣人たちが前世で某甲に借財があることを指す。本来流賊の乱で死ぬはずの某甲は十数年間生き残り、隣人からの返済を待っていた。結果として隣人は、某甲を笑わせて二回目の死を遂げさせるという形で、この前世の債を返済する。蒲は、延命も死亡も天の定めであると解釈した。

こうして独特の結末を持っている点と蒲の議論を踏まえると、「諸城某甲」は、猟奇性を重視した従来の再生譚から一線を画した作品として捉え得る。「諸城某甲」の主人公が二回目の死によって明らかにしたのは、運命に対する作者の考え方である。人間の生と死は自分が決めることではなく、前世の因果に由来するものである。この思索は、奇聞怪談の蒐集に留まる類話より遥かに優れた点である。

芥川も、「諸城某甲」の特殊性を意識したはずである。その証拠の一つは、彼が『太平広記』の「再生」部類に目を通しながらも、それを「首が落ちた話」の主な材源として採用しなかったことである。須田千里の論[6)]をはじめとする先行研究によって、『太平広記』の「士人甲　易形再生」が芥川のもう一つの短篇小説、「馬の脚」（1925年、『新潮』1月号と2月号）の典拠であることがすでに判明している。「士人甲　易形再生」と前述した断頭再生譚

は同じく『太平広記』巻376、「再生二」に収録された話であり、「士人甲易形再生」が第8篇にあたる。芥川が第8篇「士人甲　易形再生」から「馬の脚」に材を取ったことを鑑みると、他の再生譚にも目を通した可能性が高い。さらに、前述した「王穆」のあらすじと芥川の「諸城某甲」を対照すると分かる通り、後ろから首を斬られる、馬に載せられて戦場から逃げ出すといった場面において両者は相似している。要するに、芥川は『太平広記』の「再生二」を見たうえで、いくつかの場面描写を「首が落ちた話」へ取り入れた可能性が高い。しかし、芥川が自ら認めた「諸城某甲」の材源は『聊斎志異』の「諸城某甲」しかない。

> 「もう一つの序に言うが、聊斎の諸城某甲と云う話には、戦で頭に創を負った男が、後で笑ひすぎて頭を落した事が書いてある。それと同じような思いつきは、西洋人にもあったと見えてアプレイウスの一番始めか何かにも魔女に首を斬られた男が、あくる日泉を飲もうとして、首を落としてしまう所があった。但し「首を落とす話」は聊斎の話が材料になっている」。[7)]

つまり芥川の創作欲を引き出して新たな作品を生み出させた主たる材源は、「諸城某甲」に違いない。『太平広記』に紹介されたハッピーエンドの類話より、不意に訪れる二回目の死が描かれた「諸城某甲」のほうが彼の興味を引き起こしたのだ。

さらに、芥川は『聊斎志異』の解釈ないし教訓の部分、つまり「異史氏曰」を重視した。『聊斎志異』における「異史氏曰」の部分は作者の趣旨を表す重要な部分であるが、昭和以前には日本の翻案・翻訳から意識を向けられなかった。例えば、柴田天馬『和訳聊斎志異』（玄文社、1919年）には、「志異各篇中異史氏曰として著者の短評を項末に附したものがあるが、多くは旧儒的訓戒に過ぎず、讀後の興味を殺ぐものが少なくないから、一括之を割愛した。」[8)] という理由で「異史氏曰」の部分を削除した。後の田中貢太郎訳『聊

斎志異』（「支那文学大観」12巻、支那文学大観刊行会、1926年）も物語の部分だけを翻訳した。要するに、少なくとも芥川の時代までは、『聊斎志異』を単なる奇聞怪談集として読むのが普通であった。しかし芥川は「異史氏曰」の部分を非常に意識していた。芥川の『聊斎志異』評を確認すると、そこには「満洲朝廷に潔からざるの余り、牛鬼蛇神の譚に託して、宮掖の隠微を諷したる」[9] という指摘があり、彼が『聊斎志異』と政治、社会現実の関連性に注目したことがうかがえる。『聊斎志異』「酒虫」の翻案である「酒虫」（『新思潮』、1916年6月）を創作する際、芥川は原典「異史氏曰」の部分を「第一の答」という形で保留しており、また、「自分は、唯、支那の小説家のDidacticism に倣って、こう云う道徳的な判断を、この話の最後に、列挙して見たまでである」[10] と書いている。つまり芥川には、奇抜なあらすじだけではなく、思想ないし教訓の部分にも常に注目する傾向があった。そうすると、「首が落ちた話」を創作する際、芥川が、奇聞にとどまる『太平広記』に満足せず、さらなるDidacticismを内包する『聊斎志異』の「諸城某甲」を種本にしたのもおかしくない。

3、「諸城某甲」から「首が落ちた話」へ

前述した通り、芥川は「諸城某甲」における二回目の死とその教訓性を意識したため、それを主な材源として「首が落ちた話」を執筆した可能性が高い。では「首が落ちた話」においては、二回目の死とその教訓性がどのような形で展開されたのか。また、その中身は種本の「諸城某甲」と一致しているのだろうか。

まず物語の内容から見ていくと、何小二が一回目の死から生き返って無事に生活するものの、些細なことで二回目の死亡を迎えるという粗筋は、ほかの断頭再生譚ではなく、独特な結末を持つ『聊斎志異』の「諸城某甲」に倣ったに違いない。そして構造に関して言えば、前半部分の物語（「上」、「中」）と後半部分の議論（「下」）から成る「首が落ちた話」は、『聊斎志異』の「物

語＋異史氏曰」の構造を継承している。「上」と「中」は日清戦争中の何小二の一回目の死とその体験を描いており、「下」では、戦争が終わった一年後に、陸軍木村少佐が技師の山川理学士と一緒に何小二の二回目の死について書かれた新聞を見、何小二の生前と瀕死体験について議論する。木村少佐は、「異史氏曰」と同じような役割を果たしている。

あらすじと構造が相似しているとはいえ、何小二の二回の死亡とそれを巡る議論は、種本の「諸城某甲」とは違う。まずは、二回の死亡についての描写である。「諸城某甲」においては、主人公の某甲が戦乱に巻き込まれて首が切られた経緯が書かれているが、某甲の瀕死体験がいっさい書かれていない。それに対して、「首が落ちた話」には、死に直面する何小二の心理の動きを描いている。

「上」において何小二は最初「私を兵卒にした事情に幾分でも関係のある人間が、皆私には敵と変わりがない」[11)]と憎んでいた。しかし、その考えは「中」で変化していく。意識が朦朧としていく何小二の眼の前に、「彼の母親のうすよごれた裙子」[12)]、「生まれた家の後にある、だだっ広い胡麻畑」[13)]、「燈夜に街をかついで歩く、あの大きな竜燈」[14)]と「華奢な女の足」[15)]などの幻覚が現れてくる。これらの幻覚はいずれも、残酷な戦場からは遠く離れた、人情味の溢れた日常生活の映像であり、死に直面した何小二が最も未練を感じるものである。しかし、これらの幻覚は一瞬で「雲の影に吸われてしまった」[16)]。

> 何小二は心の底から、今までに一度も感じた事のない、不思議な寂しさに襲われた。彼の頭の上には、大きな蒼空が音もなく蔽いかかっている。人間はいやでもこの空の下で、そこから落ちて来る風に吹かれながら、みじめな生存を続けて行かなければならない。これは何と云う寂しさであろう。（中略）ああ、あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と変らないのであろう。もし彼等が幻でなかったなら、自分は彼等と互に慰め合って、せめて一時でもこの寂しさを忘れたい。（中略）彼の今までの生活が、いかに醜いものに満ちていたか、それは今更云う必要はない。彼は誰にでも謝

たかった。そうしてまた、誰をでも赦したかった。

「もし私がここで助かったら、私はどんな事をしても、この過去を償うのだが。」[17)]

何小二は人生の本質、いわゆる「みじめな生存」を意識した。そして彼の心の中から今までなかった、人間世界の敵対関係を圧倒する、尊い感情が生まれてきた。死に瀕した何小二は、自分も日本軍もみな同じく「みじめな生存」と「寂しさ」を共有する人間同士であることを感じ、敵であるはずの日本軍と「互に慰め合う」ことを求める。人間同士の争いに巻き込まれた「今までの生活が、いかに醜いもの」であるかを悟った何小二は、「誰にでも謝たかった。そうしてまた、誰をでも赦したかった」と改心し、もし助けられたら「過去を償う」と決める。何小二はこれまで何も知らぬまま無意味な争い、「みじめな生存」を続けていたが、瀕死体験によって自分、更に言えばすべての人間の生存を見つめ直す機会を得、そこから悟りを開いた。言い換えれば、何小二の死の瞬間は、彼のすべての日常より重みを持っているのである。「中」は、何小二の心理活動を通して死の重さを描き出す一章であるともいえる。

『聊斎志異』の「諸城某甲」との対応箇所がない「中」は今までの先行研究において多く注目されているが、以下に示した通り、材源に関する考察が主となる。

該当箇所：	材源：
高い蒼空を見上げる	トルストイ「戦争と平和」[18)]
瀕死する際の幻想	アラブローズ・ビアス「アウル・クリーク橋事件」[19)]
瀕死する際の改心	ドストエフスキー「白痴」[20)]

それ以外にも、夏目漱石の『思ひ出す事など』から影響を受けているという指摘もある。[21)]

「中」に考察の重点を置き、そこから「首が落ちた話」を評価する先行研究も多い。例えば、「戦場の非情な場面が描かれており、一種の反戦小説」[22)]、

「清国側に視点を置いて書かれた日本の小説」[23]、あるいは「「戯作三昧」（大6・5）と「地獄変」（大7・1）という高い山頂に挟まれた低い鞍部の時期の小品群の一」[24]であり、「刹那の感動」を表現する作品群に属する小説であるというようにこの作品を評価している。しかしもしこれらの先行研究が指摘する通りであれば、「上」と「中」だけでこれらの主題を表現すれば十分であるはずだ。芥川はなぜ物語を「中」の悟りのところで終わらせず、「下」を設けたのだろうか。

その理由は、前述したように、『聊斎志異』の「物語＋異史氏曰」という構造を意識的に継承したためである一方、「首が落ちた話」の主旨が死、ないし、悟りの重大性に留まらないためである。死の重さと尊さを描く「中」とは対照的に、「下」における『神州日報』の新聞記事は、生き返った何小二の堕落と絶命を描いている。

> ――街の剃頭店主人、何小二なる者は、日清戦争に出征して、屡々勲功を顕したる勇士なれど、凱旋後兎角素行修らず、酒と女とに身を持崩していたが、去る一日、某酒楼にて飲み仲間の誰彼と口論し、遂に掴み合いの喧嘩となりたる末、頸部に重傷を負い即刻絶命したり。ことに不思議なるは同人の頸部なる傷にして、こはその際凶器にて傷けられたるものにあらず、全く日清戦争中戦場にて負いたる創口が、再び、破れたるものにして（中略）諸城の某甲が首の落ちたる事は、載せて聊斎志異にもあれば、該何小二の如きも、その事なしとは云可らざるか。云々。[25]

この新聞記事は、何小二が些細なことで再度命を落したことを伝え、「中」に書かれた何小二の尊い改心と著しいコントラストを示している。が、何小二を批判するように見える文章があるとはいえ、最後、何小二の死亡事件に対しての議論は一つもない。なぜなら、この新聞記事を載せている「神州日報」は、1907年に創刊された、猟奇性を主眼とする実在の新聞である。「神州日報」は元々清王朝に反対し、民主思想を宣伝する新聞として上海で大き

な影響力を持っていた。しかし、芥川が「首が落ちた話」を創作した時期（1917年末）には、創刊者と初期執筆者たちの退出とともに、「神州日報」の政治主張はどんどん曖昧とおり、売り上げも伸び悩んでいた。その後、時局と太平洋戦争のため二回の休刊を経て、影響力も弱くなっていく。1945年に一度復刊したが、翌年ついに廃刊となった。恐らく芥川が当時接触した「神州日報」は、政治評論や国内国外の新聞の代わりに、猟奇的な内容の記事で人気を博そうとした時期のそれである。言い換えれば、この時の「神州日報」は、奇聞怪談を収録するばかりの類書『太平広記』と同じで、教訓性や議論を読者に与えない読物としてあった。その猟奇的な記事から教訓性を読み取って読者に示すのは、「神州日報」それ自体でなく木村少佐の役割である。

> すると木村少佐は、ゆっくり葉巻の煙を吐きながら、鷹揚に微笑して、
> 「面白いだろう。こんな事は支那でなくっては、ありはしない。」
> 「そうどこにでもあって、たまるものか。」[26)]

「支那」という国は、他の国ではありえないことが起こり得る、異界のような場所である。そして、日本やほかの国の新聞と違い、「支那」の新聞は、荒唐無稽な話ばかり紹介しており、その中には「嘘」も混在しているため、必ずしも一般性、重大性を持つ真面目な記事ばかりではない。こういう先入観は、芥川の執筆時期、日本人が中国に対して抱いていた考え方を反映している。また、「神州日報」や『聊斎志異』を含む中国の書物に対する当時の理解をも反映している。

しかし、議論の担い手である木村少佐は日本軍の野戦病院に収容された何小二を知っており、その時の何小二が「極正直な、人の好い人間で」[27)]であったと回想している。そして、「異史氏曰」のように、何小二の生前と二回目の死亡について以下に解釈している。

> 「いや、僕はそう思わない。少くともあの時は、あいつも真面目にそう

感じていたのだろうと思う。恐らくは今度もまた、首が落ちると同時に（新聞の語をその儘使えば）やはりそう感じたろう。僕はそれをこんな風に想像する。（中略）あいつはその時、しみじみまた今までの自分の生活が浅ましくなった。が、今度はもう間に合わない。前には正気を失っている所を、日本の看護卒が見つけて介抱してやった。今は喧嘩の相手が、そこをつけこんで打ったり蹴ったりする。そこであいつは後悔した上にも後悔しながら息をひきとってしまったのだ。」[28)]

作者は一度も登場しないため、木村少佐の議論が正しいかどうかも明言していない。これは、作者の意見を直接に読者に押しつける『聊斎志異』とは違う、芥川の婉曲な書き方である。このためにこそ、「首が落ちた話」に関する先行研究の解釈は多岐にわたっているのだろう。水洞幸夫[29)]は木村少佐の語りによって肯定される何小二の改心を、芥川中期作品に貫くモチーフ、「刹那の感動」に結びつける。関口安義[30)]は「人間存在の不条理性を示す」と論じている。一方、金子佳高[31)]は木村少佐の議論を否定する立場から、軍人である木村少佐の何小二に対する即断に「中国貶視のパラダイム」があると指摘している。

本論は前述したように、「首が落ちた話」と種本である「諸城某甲」の構造上の相似から、木村少佐の議論が作品の主旨を反映する部分だと考える。つまり作品の教訓性を示す部分として解釈している。たとえ金子氏が指摘しているように、木村少佐の議論が多少当時の社会世論に影響されたとはいえ、芥川が創作意図をその議論に託していることは間違いない。

「諸城某甲」の解釈が不意な死亡に重点を置いているのに対して、木村少佐の議論は何小二の生前に関するものである。木村少佐は何小二の瀕死体験の重さと尊さを認めながらも、堕落して人と喧嘩する何小二の姿を想像している。何小二の軽い日常生活と重い死の対比は、木村少佐の解釈の中で再度強調される。そして、木村少佐は以下のように自分の議論をまとめる。

「我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知って置く必要がある。実際それを知っているもののみが、幾分でもあてになるのだ。そうしないと、何小二の首が落ちたように、我々の人格も、何時どんな時首が落ちるかわからない。――すべて支那の新聞と云うものは、こんな風に讀まなくてはいけないのだ。」[32)]

死に瀕して得た重大な悟りは、日常生活に戻ったら忘れがちなものである。これは何小二だけではなく、人間の「あてにならないこと」であり、関口安義が指摘する「人間の不条理性」であるとも言える。しかし、木村少佐の議論の重点は、それを「痛切に知って置く必要がある」という忠告の部分である。つまり、死の重大さを忘れないかぎり人間は、堕落した軽い日常生活から幾分でも自分を救うことができるということである。木村少佐は何小二の生前に関するところから議論を始め、そして凡ての人間の生き方の問題にたどり着く。確かに人間の生と死は、「諸城某甲」に書かれている通り、自分が左右できない、天命である。「首が落ちた話」において、何小二が無意味な戦争に巻き込まれて首を切られ、そして一年後酒楼で些細な喧嘩でまた命を落とすということも、彼自身には左右できない運命であり、「諸城某甲」の展開とほぼ一致している。しかし、人間の死が天命であると嘆く「諸城某甲」と違い、「首が落ちた話」の議論は人間がその天命の下で自ら選ぶべき生き方の問題に着眼している。人間が死亡の重さ、命の尊さを忘れてしまったら、何小二のように、死に際して「後悔した上にも後悔しながら息をひきとってしま」う。しかし、天命を解し、さらに人間自身の弱さ、「あてにならないこと」を常に肝に銘じれば、軽薄な日常生活を見直し、「みじめな生存」を超越することができるかもしれない。要するに、「首が落ちた話」は「諸城某甲」の議論の形を継承しているが、議論の中身は違う方向、更に言えば正反対の方向へと向かっている。天上の問題に着目する清代の中国知識人蒲松齢から感銘を受けた芥川は、相似する物語を通して地上の問題、現実のことに目を向けさせる。「すべて支那の新聞と云うものは、こんな風に讀まな

くてはいけないのだ」というのは、奇聞怪談にすぎないと見られる「支那」のことから、近代人の生存にまつわる教訓を読み取れることを強調している。

4、おわりに

「首が落ちた話」の主な材源となっている『聊斎志異』の「諸城某甲」は、奇抜な展開と教訓性を両方とも持っており、中国古典の断頭再生譚では群を抜いた作品である。『聊斎志異』を奇聞怪談集として捉えていた当時の評価と違い、芥川は『聊斎志異』の教訓の面にも常に注目していたため、『太平広記』ではなく『聊斎志異』の「諸城某甲」が彼の翻案欲を引き起こした。そして彼が『聊斎志異』の「諸城某甲」から倣ったのは、あらすじだけではなく、奇聞怪談に教訓性を付与する創作精神である。ゆえに、「首が落ちた話」には、「物語＋異史氏曰」という構造が継承され、木村少佐という人物が「異史氏曰」の役割を果たしている。ただ、天に帰着する「諸城某甲」の議論とは対極的に、「首が落ちた話」の議論は地上の人々の生き方への忠告に向かう。「諸城某甲」では描かれない、重い死亡と軽薄な日常生活とのコントラストを通して、現実的な教訓、すなわち、いつか訪れる死の重みを忘れて生きてはならない、自身のあてにならなさを常に意識して「みじめな生存」を超越しなければならないという教訓が、木村少佐の議論において示されている。「首が落ちた話」の改変の傾向と類似しているのは、『聊斎志異』の「酒虫」の翻案である。酒の量が天与のものであるという原典の議論に対して、芥川は「第三の答」の形で酒虫が即ち自己であるという解釈を提示している。「酒虫」を一つの傍証にすると、芥川が『聊斎志異』から取材する際の一つの傾向が浮かび上がってくるだろう。彼は支那の奇聞怪談に教訓を求め、かつ、原典の天命やさだめなどの解釈には満足せず、その議論を近代人の生存に関わる普遍的な問題に発展させる。これは当時の『聊斎志異』の他の受容者を超えた芥川の慧眼を示すものであるとともに、彼の近代作家としての独自のDidacticismとして捉えられるではないか。

［注］

1） 大庭脩「商船載来書目」（『江戸時代における唐船渡書の研究』、關西大學東西學術研究所、1967 年、p.687）には、「明和五戊子年 聊斎志異 一部二套」という記載がある。
2） 本稿における「首が落ちた話」の本文は『芥川龍之介全集』（第二巻、岩波書店、1977 年）より引用した。便宜上、旧字体、旧仮名遣いは新字体、新仮名遣いに改める。
3） 李昉等編『太平広記』第 8 冊、中華書局、1961 年、p.2990。
4） 『聊斎志異』の「竹青」の引用は『詳注聊斎志異図咏』（同文書局、1888 年）に拠る。この版本も田中貢太郎訳、公田連太郎注の『聊斎志異』が拠った版本である。
5） 蒲松齢著、増田渉訳『聊斎志異 : 中国怪異譚』第四巻、平凡社、2009 年、p.367。
6） 須田千里「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』: その典拠と主題をめぐって」、『光華日本文学』4、光華女子大学日本文学会編、1996 年。
7） 「文藝雑話 饒舌」、『芥川龍之介全集 第二巻』、岩波書店、1977 年、p.166。初出は『新小説』1918 年 5 月号。旧字体、旧仮名遣いは新字体、新仮名遣いに改める。
8） 柴田天馬「例言」、『聊斎志異』、創元社、1951 年、p.8。
9） 「骨董羹」、『芥川龍之介全集』第三巻、岩波書店、1977 年、p.464。初出は「人間」（玄文社、1920 年 4-6 月）。
10） 「酒虫」、『芥川龍之介全集』第二巻、岩波書店、1977 年、p.182。
11） 「首が落ちた話」、p.92。
12） 「首が落ちた話」、p.93。
13） 「首が落ちた話」、p.93。
14） 「首が落ちた話」、p.94。
15） 「首が落ちた話」、p.94。
16） 「首が落ちた話」、p.94。
17） 「首が落ちた話」、pp.94-95。
18） 吉田精一「芥川文学の出典」、『近代文学鑑賞講座第十一巻 芥川龍之介』、角川書店、1958 年 5 月。及び、島田謹二「芥川龍之介とロシア小説―比較文学講演―」、『比較文学研究』14、東大比較文学会、1968 年 9 月。
19） 間野英雄「芥川とビアス」、『MEL パンフレット』2、開拓社、1930 年 10 月。及び西川正身「芥川龍之介とアンブローズ・ビアス」、『浪漫古典』2、昭和書房、1934 年 5 月。
20） 渡辺正彦「芥川龍之介『首が落ちた話』材源考―ドストエフスキー『白痴』との関連」。

21）吉田俊彦「『首が落ちた話』（芥川龍之介）小考―認識面における漱石の影響―」、『岡大国文論稿』、岡山大学文学部言語国語国文学会、1989 年 3 月。
22）関口安義『よみがえる芥川龍之介』、日本放送協会、2006 年 6 月。
23）関口安義「「首が落ちた話」論――人生のしたたかな眼」、『芥川龍之介研究年誌』1、芥川龍之介研究年誌の会編、2003 年 3 月。
24）渡辺正彦「芥川龍之介『首が落ちた話』材源考―ドストエフスキー『白痴』との関連」、『近代文学論』14、近代文学論同人会、1986 年 3 月。
25）「首が落ちた話」、pp.96-97。
26）「首が落ちた話」、p.97。
27）「首が落ちた話」、p.98。
28）「首が落ちた話」、p.99。
29）水洞幸夫「「首が落ちた話」・「西郷隆盛」の位置――解釈する人々」、金沢女子短期大学紀要『学葉』32、1990 年 10 月。
30）関口安義「「首が落ちた話」論――人生のしたたかな眼」。
31）金子佳高「芥川龍之介「首が落ちた話」論：日清戦争と語りの戦略」、『文学研究論集』43、明治大学大学院文学研究科編、2015 年。
32）「首が落ちた話」、p.100。

付記：本稿は、平成 29 年 8 月 29 日～ 9 月 1 日に、中国西北大学で開催された和漢比較文学会第十回特別例会における同題の研究発表に基づく（発表は 8 月 30 日）。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

A Comparative Analysis between Akutagawa Ryunosuke's *Kubi Ga Ochita Hanashi* and Pu Songling's *Zhucheng Moujia*

Chaoya CHEN

Akutagawa Ryunosuke's short story titled *Kubi Ga Ochita Hanashi* was published in Shin Cho, January 1918. According to him, the story is coming from *Zhucheng Moujia*（諸城某甲）, a short story of *Liaozhai Zhiyi*（聊斎志异）which is Chinese famous strange story collection by Pu Songling（蒲松龄） in the Qing dynasty. Although many researches have been taken, but those researches only compare the difference between two works from plots.

This paper attempts to do a comparative analysis between *Kubi Ga Ochita Hanashi* and *Zhucheng Moujia*. The features of *Zhucheng Moujia* can be clarified so that the reason why Akutagawa Ryunosuke chosed it as a source book will also be unraveled. *Kubi Ga Ochta Hanashi* is not only following the plots, but also the construction and the Didacticism of *Zhucheng Moujia*. However, as the theme of *Zhucheng Moujia* focus on destiny and heaven, the theme of *Kubi Ga Ochita Hanashi* goes in the opposite direction and focus on peoples's way of life.